

訪中を終えて考えたこと

相手を思い向き合うことで始まる、真の交流

5班

東北福祉大学

土屋 絢

私は、大学で中国の歴史や政治を勉強したわけでも、第二外国語で中国語を学んだわけでもありません。ですが、ある出来事をきっかけに、私は中国に対してとても興味を持つようになりました。それは、私が大学一年生の時、一人暮らしをしながら、アルバイトを始めたばかりの頃のことです。生まれて初めてのアルバイト、慣れない作業と緊張でくたくたになっていた休憩時間のとき、誰かが私の目の前にジュースを置いてくれました。驚いて顔をあげると、同じ飲食店の厨房でアルバイトをしている中国人留学生の方がニコッと笑って、去っていきました。私は、この中国人の方のやさしさに触れてから、中国へのイメージが変わり始めました。新聞やテレビでは、日中間の政治面での問題が取り上げられ、中国に対して批判的な意見が多くみられます。国だけでなく中国人の方々に対しても、反日感情が強い、日本に来ればマナーがなっていないなど、ネガティブな反応をよく目にします。ですが、私が親切にさせていただいた中国人の方は、そのようなネガティブなイメージとは逆に、とても優しさにあふれていました。マスメディアが報道している外側から見ただけの印象ではなく、人と人として向き合い、相手をもっとよく知りたいと思いました。そこで、学生との交流もプログラムに含まれる、訪中団への参加を決意しました。

今回、国際関係学院と広東外語外貿大学の生徒の皆さんと交流してみて、中国の学生の皆さんにとっても親近感が湧きました。大学の課題に苦戦したり、自分の将来に悩んだりすることや、おしゃれを楽しむ感覚は私たちと何も変わりません。夕食の席では、お互いの家族や趣味の話をして楽しいひと時を過ごしました。中国語が分からない私に合わせ終始日本語で話しかけてくださる心遣いと、流暢な日本語から、中国の学生の皆さんの思いやりや多言語を習得するための相当な努力を感じました。はじめのうち、私は「中国の学生」というカテゴリを、自分の中に無意識に作って交流していました。ですが、話を重ねていくうちに、「中国の学生」という印象がなくなり、人と人として向き合い、分かりあえるという感覚になりました。お互いのことを理解しようと行動しているからこそ、このような気持ちになったのだと思います。中国の学生の方と、今この瞬間に一人の人として向き合うとき、国籍の違いは関係ないと感じました。中国の学生の皆さんとは、WeChatのアカウントを交換し、日本に帰国してからも交流が続いています。交流会の時間だけでは話されなかったことを、たくさん語り合っています。

日本と中国は、政治面などで分かり合えていない部分があります。そのことに関連する報道で、中国全体へのネガティブなイメージを持つ人が多くいます。ですが、今回、私は中国の学生の皆さんと交流し、実際に中国に暮らす人々が報道されているイメージとは違

っているということを知ることが出来ました。これからの日本と中国の関係を築いていく中で、もっと両者が直接的に交流することが必要なのではないかと思います。交流を通して、一人の人として向き合うことで、お互いへの理解が深まり、更に一歩進んだ関係を築いていけるのではないかと思います。

私は、今回の訪中が人生で二度目の日本を離れた経験でした。言語も文化も違う中国を知ることができ、とても充実した一週間でした。そして、その一週間で共に過ごした仲間たちにも、たくさん刺激をもらいました。訪中団のメンバーは、みんな様々なことに挑戦していました。自ら行動し、チャンスを掴み取っていくアクティブさに、私も新しい世界の扉を自分で押し開けていこうと思いました。

今回、訪中団の一員として中国を訪れるという、素晴らしい機会を与えてくださった日中友好協会の皆様に心から感謝申し上げます。また、中国で私たちを迎えてくださった皆様、私は皆様のあたたかい歓迎に胸がいっぱいになりました。本当にありがとうございました。